

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	<p style="text-align: center;">松浦 恵美</p> <p style="text-align: center;">【比較社会文化学専攻 平成22年度生】</p>	要 旨
論文題目	<p>Henry James on Ethical Questions within the Process of Globalization</p>	<p>本論文はアメリカ合衆国出身で長らく英国に居住し、晩年英国に帰化した米国人小説家ヘンリー・ジェイムズ（1846-1916）の後期から晩年の小説作品を主な対象に、19世紀後半から20世紀にかけて、地政学的条件の変化にともなうグローバルな権力関係の変化を背景に、新しい状況や秩序の変化に直面する人々の個人の在り方および主体のゆらぎを描くジェイムズのテキストが、19世紀的な道德律とは異なる新しい倫理的姿勢を提示していることを分析・考察した英語による論文である。</p> <p>序論では、アメリカ合衆国が産業的発展を遂げ帝国主義への転換を果たしたのと期を一にグローバル化が進み人々の生活が変化した様態をジェイムズのテキストが描いていること、そのグローバル化による不確実で不安定な状態を、今日の世界の基本的条件と連続して考察しうること等、本論をグローバル化の文脈で検討する根拠と必然性が述べられる。</p> <p>第1章はジェイムズ最初期の長編小説 <i>Roderick Hudson</i>(1875)を、女性登場人物の欲望とその表象、彼女と語り手の男性との非異性愛的関係に注目して分析し、第2章は中期の代表作 <i>The Portrait of a Lady</i> (1881)を投資および起業という経済的概念を援用して、主人公 Isabel の19世紀の結婚制度に対する挑戦として読み解き、第3章は中期の長編小説 <i>The Princess Casamassima</i> (1886)におけるテロリズムと民主主義への不安、女性の政治参加をめぐる明らかになる近代民主主義の限界および可能性、第4章は後期中編小説 <i>The Spoils of Poynton</i> (1895)に描かれる19世紀末の英・米社会における物質的条件の変化と倫理的可能性、第5章は円熟期の長編小説 <i>The Ambassadors</i> (1903)の主人公の選択に反映される、20世紀初頭グローバル化初期の世界の倫理性、第6章はジェイムズ最晩年のエッセイ “The Long Wards” (1917)に示される、トランスナショナルな可能性について考察する。</p> <p>新たな時代に応答し展開し続けるジェイムズの倫理的姿勢に着目し、あらためて今日的な視点から考察し位置づけを行う斬新な論考である。</p>
審査委員	(主査) 教授 戸谷 陽子	
	准教授 高桑 晴子	
	准教授 中野 裕考	
	教授 松崎 毅	
	教授 清水 徹郎	